

# 読書

## 医師の実像 もっと知ることは患者にも有用

話題の本棚

西寺桂子著『医師の死角、患者の死角』は、医療側の努力と等しく、受け手である患者も努力すべきだという。描写される「困った患者」になっただけでなく、我が身を振り返ってみなければ。(前田浩次)

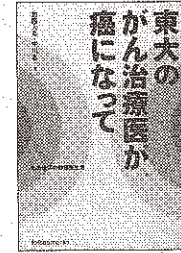
インフォームド・コンセントやセカンドオピニオンの重視など、医師と患者・家族の意思疎通を促す流れは顕著だ。しかし依然として、互いの満足度は高くないのではないかと。そんな状況を少しでも改善しようという本が出てきている。

尾藤誠司編『医師アタマ』は、医師たちが「自分の意見が患者にわかってもらえないことを、患者の無理解によると一律に考えていないか」と自省した本だ。健康とは、正常とは、様子をみるとは、治療の効果と負担とは、などと、医師がどう考えていくのかを知ることが、患者にとっても、伝えたいことをうまく伝えるためには有意義だろう。生命にかかわる「異文化」間コミュニケーションは、学校教育で訓練してもいいはずだ。

加藤大基・中川恵一著『東大のがん治療医が癌になつて』は、アタマだけでなく、医師のカラダその活動の実態について、かなりページを割く。医療事故とか高収入とかの流布したイメージが、誤解・無理解、政策の不備につながっている、と。「マンパワー不足の医療部門がある。徹夜明けのパイロットが操縦する飛行機に乗りたいですか？ 徹夜明けの外科医の手術を受ける可能性は十分あるんですよ」と訴える。



尾藤誠司編『医師アタマ 医師と患者はなぜすれ違うのか?』臨床研究医たちが、コミュニケーション不全は、医師の論理が持つ頭の固さに起因、との仮説を自己分析している。患者にとっても、なるほど先生はそう考えるのかと納得。(医学書院・2310円)



加藤大基・中川恵一著『東大のがん治療医が癌になつて』71年生まれの放射線療法医師が、昨年5月に肺がんとわかり、手術した。患者としての考え方に気づいたという一方で、病棟勤務医の過酷な労働も深刻と訴える。(ロハスメディア・1575円)

話題の本棚